

デリダにおける贈与と交換 (Derrivative)

ダリン・テネフ

(訳＝横田祐美子、松田智裕、亀井大輔)

私はこのテキストで、デリダの贈与〔gift〕と与えること〔giving〕の概念を、『時間を与える』¹を案内役として簡潔な仕方でも明らかにしたい。切り詰められた手短すぎる論考にはリスクがあり、最小限のリスクはその不完全さだろう。だがこの小さな悪弊は、本稿の場合には、深刻な脅威をもたらす。というのも、贈与の問題系は一連の語や概念——その周囲でデリダの思考が動き回り、脱構築を発動する語や概念——に直接関係するからである（「語」という語と「概念」という語は最も適切とはいえないが、ここでは暫定的にこれらの語を用いることにする）。私がいま注意を向けているのは、書かれた言葉（エクリチュール）、痕跡、散種、差延、脱固有化、残抗、緊縛構造、一般的エコノミー〔＝一般経済〕、秘密といった語や概念である。贈与と与えることの解明は、同時にこれらの概念や語すべてに取り組み、これらが展開された諸々のテキストを最後まで追求することを前提としている。しかし、争点となるトピックに直接関係しないときには、本稿のために他のテキストの参照は最小限にとどめることにする。

1. 不可能な贈与

デリダの出発点であり、彼の考察がたどる基本線でもあるのは、贈与のアポリアである。贈与の経験はアポリア的である。このことは、この経験が直面する主な困難に由来する。すなわち、贈与は不可能だ、ということである。

¹ Jacques Derrida, *Donner le temps. 1. La fausse monnaie*, Paris : Galilée, 1991. English translation: Jacques Derrida, *Given Time: 1. Counterfeit Money*, trans. Peggy Kamuf, Chicago and London: University of Chicago Press, 1992. (以下、フランス語版と英訳版の頁数をそれぞれ DT と GT の略号で表し、頁数を示す。)

贈与が、お返しとして何も受け取ることなく与えることを指示するなら、そうであるかぎりでは贈与は存在しない。戻ってくるもの、お返しとしての何か、反対贈与があるなら、贈与はもはや贈与ではなく、交換の一要素、何か他のもののためのものである。贈与が贈与であるとすれば、それは回帰なきものでなければならず、回帰なしでなければならない。贈与をエコノミーの循環から区別するものは、循環の場合にはある種の相互性、与え返し、回復があるというまさにその事実である。「贈与があるなら、贈与の与件（ひとが与えること、与えられたもの、与えられた物としての、あるいは贈与行為としての贈与）は与えることに戻ってきてはならない[...]。それは循環してはならない、交換されてはならない、いずれにせよ交換過程、出発点への回帰というかたちでの円環の循環運動に尽きてはならない」(DT, 18-19/GT, 7)。

しかし、与えることはつねにある種の円環を含み、ある種のエコノミーに導く。贈与と反対贈与があるならば、反対贈与は贈与としての贈与を相殺する。なぜなら、それは交換の開始を意味するからである。反対贈与がない場合でも、事態は原理上変わらない。なぜなら、何も回帰しないためには、反対贈与があってはならないだけでなく、義務、負債、責務、感謝も、つまり——どんな関係もあってはならないからである。贈与を贈与として認識することでさえ贈与を無効にし、贈与を受け入れる行為も贈与を相殺してしまう。というのも、義務、感謝等は贈与を復元し、したがって贈与を円環のなかにはめ込むからである。贈与を受ける者は誰も、「贈与を贈与として認識」しないことが必要である。「彼が贈与を贈与として認識するならば、贈与が彼にとってそのものとして現れるならば、プレゼント [= 現在] が彼にとってプレゼントとして現れるならば [= 現在として現前するなら]、この単純な認識は贈与を無効にするに十分である。なぜだろうか。それは、言うなれば物そのものの場所に、象徴的等価物を与え返すからである。[...] 贈与の単純な同定は贈与を破壊するようにみえる」(DT, 26/GT, 13-14)。

他者が、自分が何かを与えられたと理解する瞬間から、贈与はもはや存在しない。そして、強調すべきことだが、「たとえ当人が、贈与として知覚あるいは認識した贈与を拒否するとしても」(DT, 27/GT, 14) そうであるだろう。(贈与を贈与として) 同定する働きのうちには復元があるからである。贈与が贈与としてのその意味を維持するなら、贈与は失われる。そして、贈与を無効にするのは他者の認識だけではない。贈与は与える者にとっても贈与であってはならない。なぜなら、もし贈与で

あるとすれば、象徴的な復元のプロセスを作動させることになるからである（通りがかりに言っておけば、象徴的なものは、ある別の二次的な水準で交換を復元するものではない。それはまさしく無視できるものではない、なぜなら象徴的なものは「交換と負債の秩序を、あるいはそのなかでは贈与が失効するような循環の法や秩序を開き、構成する」（DT, 26/ GT, 13）からである。たとえば、贈与としてのリング、愛する人に与えられるリングはまさに、しかじかの素材でつくられたこの丸い対象ではない。リングがひとつの贈与として重要になるのはまさに、それがあの特定の機会に、この特定の人物から、あの特定の人物に与えられたからである。言い換えれば、それは象徴的なものに巻き込まれているかぎりにおいてのみ、象徴的価値をもつかぎりにおいてのみ、贈与であることができる）。

こうした考察によって、贈与の不可能性が明らかとなる。デリダの言葉を用いれば、「贈与が存在しないなら、贈与は存在しない、しかし贈与が他者によって贈与として把握され、見守られているなら、その場合もまた、贈与は存在しない」（DT, 27/ GT, 15）。贈与がそのものとして同定されるなら、贈与は交換の円環のなかに、一種のエコノミーのなかにただちに消失してしまう。しかし、誰にとっても贈与が存在しないなら、贈与を与えられる者にとっても（自分が贈与を受け取ったことに気づかない人物を思い浮かべることができる）、与える者にとっても（自分が贈与をもたらしていることに気づかない人物を思い浮かべることができる）贈与が存在しないなら、端的に贈与は存在しないのである。

ここで私が強調したいのは、こうした考察はデリダの贈与についての仕事における出発点にすぎず、この出発点は思考を働かせることを止めないということである。それは終わりではなく、始まりである。そして、『時間を与える』のエピグラフにつづくデリダの最初の文章が「不可能なものから始めよう」（DT, 17/ GT, 6; 強調は引用者）であるのは偶然ではない。

贈与の不可能性が思想家の前に置く課題は、この不可能性のもつ、エコノミーと円環との接続関係である。

2. 円環に入り込むこと

贈与とエコノミーの関係はふたつの円環の関係ではない。ある意味で、ふたつの

円環の関係とはおそらく、なおも循環的な関係、ふたつのエコノミーの関係であるだろう。そのような関係だとすれば、それはまさに贈与「そのもの」の外に出てしまうことを意味するだろう。エコノミーと円環——それは存在するいつさいのものである（これはまさに円環の神話的な意味である）——という見地からすれば、贈与はありえない残余（*reste*）や過剰「である」だろう。しかしながら、それはある活動的な残余である（デリダは本来的な能動性でも受動性でもないこの特異な活動性を示すために新しい語、*残抗*を用いた²）。そして過剰は次のように贈与の本性を定義するだろう。「贈与の問題は、はじめから過剰であり、ア・プリオリに過度なものであるというその本性に関わっている」（DT, 56/ GT, 38）。それでいて過剰は円環そのものを構成する。過剰は「円環を引き起こし、それをはてしなく回転させる。そしてその運動を、つまり円環とその輪がけって内包したり無効にしたりしえない運動をそれに与えるのである」（DT, 54/ GT, 37）。

理解を容易にするため、贈与の過剰な側面を取り上げることにして、残りものや残余については別の機会に譲ることにしよう。贈与の過剰さとは、ある意味で、円環と、円環という視点からは考えられえないが、しかし円環とは無関係ではないものの、つまり贈与「そのもの」との結びつきを明確化するのに役立つものであるだろう。

a) 過剰

1960年代以降、デリダは過剰という観念に関心を抱き、『エクリチュールと差異』所収のバタイユについてのテキストにおいてこれを主題的に論じており、そこでは

² デリダが自身のテキストにはじめてこの新しい語を登場させたのは、ほぼ間違いなく1970年代はじめである。Jacques Derrida, “Signature événement contexte” (1971) (*Marges de la philosophie*, Paris: Minuit, 1972, p. 378) [ジャック・デリダ「署名 出来事 コンテキスト」、『哲学の余白』下巻所収、藤本一勇訳、法政大学出版局、2008年、247頁]；*Eperons. Les Styles de Nietzsche* (1972/ 1973), (*Eperons/ Spurs*, bilingual edition, trans. Barbara Harlow, Chicago& London: Chicago University Press, 1979, p.130, 132) [ジャック・デリダ「尖鋭筆鋒の問題」、『ニーチェは、今日？』所収、森本和夫ほか訳、筑摩書房、2002年、307-308頁]。しかしながら、残余、残りもの、残抗といったテーマが中心に据えられ、それらについての考えをデリダが十分に発展させたのは『弔鐘』(Jacques Derrida, *Glas*, Paris: Galilée, 1974) においてのみである。

過剰が直接的にエコノミーの問題に結びつけられている³。バタイユとデリダにとって、過剰とは純粋な消尽 (*dépense*) であり、まったく喪失である。それは肯定性に対立しない否定性である。というのも、肯定性に対立する否定性であるとすれば、否定性は肯定性に従属させられ、弁証法の一部になってしまうからである。弁証法の支配力のなかでは、否定性は意味や真理、価値に結びつけられ、資本化されるだろう。もし消尽が絶対的であるならば、それはまったくいかなるかたちにおいても留保されてはならないし、おのれ自身を失い、おのれ自身を消し去るために、その意味を失わなければならない。この絶対的な消尽、まったく喪失を、バタイユは「至高性」と呼ぶ。デリダは「至高性は不可能なものである。したがって、それは存在しない」⁴と書き、一方のこのように理解された至高性と、他方の贈与との類似を我々に垣間見せる。だが、何を差し置いても、我々はまったく喪失に接近し、その喪失に触れている。限定経済が循環と円環を示すものならば、純粋な消尽と関わるそのとき、我々は一般経済と関わっている。というのも、一般経済とは「意味の喪失との関係」であり、喪失そのものではなく、我々がそれに接近する方法、それに触れる方法だからである。限定経済は「対象の意味および対象を構成する価値 [...] に制限され」ている⁵。そのおかげで我々は物の「商品価値」を理解することができる。限定経済は、物を、あらかじめ価値づけされたもの、何かのためのもの、あれこれをなすためのものとして、端的に言えば物の意味として指し示す⁶。そして、まさにこのようにして、限定経済は（他の何ものでもよいわけではないが、少なくとも、まずもって）意味の循環のうちに物を含みこんでしまうのだろう。それは物を知に従属させてしまう。他のすべてのものと同様に、物は意味の循環によってたえず固着化（再固着化）されることとなる。他方で、一般経済は未知のものと既知の

³ Jacques Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale. Un hegelianisme sans réserve » (1967), *L'Écriture et la différence*, Paris : Seuil, coll. « Points », 1979, p.369-407. English translation: Jacques Derrida, "Form Restricted to General Economy: A Hegelianism without Reserve", *Writing and Difference*, trans. Alan Bass, London and New York: Routledge, 2005, pp. 317-350 [ジャック・デリダ「限定経済から一般経済へ 留保なきヘーゲル主義」、『エクリチュールと差異』所収、合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013年、505-564頁]。

⁴ Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale », p. 397; p. 342 for the English translation [同前、548頁]。

⁵ Ibid., p. 399; English translation, p. 343 [同前、551頁]。

⁶ このことは、マルクスに対してほのめかされた〔デリダの〕見解でもあるようだ。つまり、物がしかじかの目的のために利用されるべきしかじかのものとして定義され、認識されたその瞬間から、それは循環のうちに書き込まれる。別様に言えば、利用価値はすでに交換価値の「亡霊」に取り憑かれているのである。

もの、ないしは知られうるもの（通常の態度において、我々は未知のものによる既知のものの固有化をたやすく見分けることができる）の方向づけられた関係を反転させ、いまや「既知のものが未知のものに関係づけられ、意味が非 - 意味に関係づけられるのである」⁷。このように、限定経済は一般経済のうちに書き込まれたものとして露呈されるだろう。一般経済は、知の地平や意味の形象に強いることで「それらを、基盤ではなく、消尽という底なきものへ、意味のテロスではなく、価値の無際限な破壊に関係づけるよう仕向けるのである」⁸。したがって、限定経済が再生産にとどまる一方で、一般経済は「絶対的な生産および破壊」⁹を計算に入れている。けれども、一般経済が、純粋な消尽が無限の意味として再び固有化されるのを認めるかぎり、すなわち、最後の再固有化に対する不可能性を指し示している一方で、無限なものにおける再固有化を認めるかぎり、一般経済そのものはいまだ意味の側に立っており、本質的な両義性をもちつづけている。デリダはバタイユに関する初期のテキストですでにこの問題について指摘しているが、その数年後にあたる 1970 年代前半にこれを発展させ、次のように述べている。「ある無限の円環が演じられ、それが人間の戯れを利用しつつ、贈与を再び固有化する。[...] 無限がおのれ自身を（思考すべきものとして）与えるやいなや、限定経済と一般経済との対立は、つまり循環と消費の生産性との対立は、消え去る方向へと進む。さらにこう言うことができるとすれば、それは無限の移行の機能、すなわち贈与と負債のあいだの無限の移行の機能でさえある」¹⁰。

この引用は 1975 年の『エコノミメシス』からのものである。そこには、バタイユに関する論考においてその輪郭が描かれた一般経済を越える批判的な足どりが見られる。それは、一般経済でさえも固有化しえないもの、まったくもってエコノミー的でないものを「露呈する」試みである。したがって、「なお我々はエコノミーを循環的エコノミー（限定経済）として規定することもなければ、一般経済として

⁷ Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale », p. 398; p. 343 for the English translation [同前、550 頁]。

⁸ Loc.cit [同前]。

⁹ Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale », p. 399; p. 344 for the English translation [同前、551 頁]。

¹⁰ Jacques Derrida, "Economimesis", In: Sylviane Agacinski et al, *Mimesis. Des articulations*, Paris : Aubier-Flammarion, coll. « La philosophie en effet », 1975, p. 71-72. English translation : Jacques Derrida, *Economimesis*, trans. R. Klein, *Diacritics*, Vol. 11, No.2, Summer 1981, p. 11 [ジャック・デリダ『エコノミメシス』、湯浅博雄・小森謙一郎訳、未来社、2006 年、40-42 頁]。

規定しているのでもない。というのも、これは仮説だが、これらふたつのあいだに
対立が成り立ちえないとすれば、ここにあらゆる困難が凝縮されることになるから
である。それらの関係は同一性でもなければ、矛盾でもなく、何か別のものにちが
いない」¹¹とデリダが書くとき、限定経済と一般経済との関係とは何かという問い
は、さらにもうひとつの要素、つまりエコノミーによって排除される要素の導入を
前提としている。それが贈与である。デリダによれば、「もし循環の形態がエコノミー
に本質的なものであれば、贈与とは非エコノミー的なままにとどまらねばならない」
(DT, 19/ GT, 7)。非エコノミー的なものを一般経済に書き込まれたものとして理解
しようとするひともいるだろうが、それは一般経済がなおエコノミーであることを
を忘れているからであろう。反対に、贈与が一般経済から生じると理解しようと
してはならず、それとは逆に、贈与から出発して、一般経済と限定経済の話へと進ま
なければならない。一般経済とは贈与と限定経済との関係なのである。つまり、贈
与 - 一般経済 - 限定経済という図式になるのだ。こうしたことは『時間を与える』
のなかでけっして明確にはされていないが、贈与に関するデリダの別のテキストの
文脈にこの本を置くとすれば、より端的に言う都十分に注意しながらこの本を読む
とすれば、上記の関係を導き出すことができるだろう。

b) 贈与から贈与 - 交換へ

この関係の一般定式、言い換えればデリダにおけるその連関の仕方は、すでに
1960 年代以降のテキストにおいて、書かれた言葉（エクリチュール）と声、テク
ストと言語記号、あるいは痕跡と現前とのつながりを明らかにするときにもられ
る。しかしながら、贈与に関していえば、それが最も集中的に提示されているのは
1974 年の『弔鐘』においてである¹²。もっとも、「限定経済から一般経済へ」のなかで、
真の敵対者であるヘーゲルとの対立において、バタイユがある意味でその媒介者と
しての役目を果たしていたのだとすれば、『弔鐘』での対決は直接的なものである。
贈与が論じられるのは、デリダが「光」について注解している場面であり、それは『精
神現象学』において「絶対知」の前、最後から 2 番目の章である「宗教」で語られ

¹¹ Ibid, p. 58; English translation, p. 4 [同前、7 頁]。

¹² *Glas*, op.cit., p. 265-272. これ以降は G という略号を用い、つづいて頁数を示す。English translation: Jacques Derrida, *Glas*, trans. John P. Leavey, Jr., Richard Rand, Chicago: Chicago University Press, 1986. 英訳については Gen と略記する。また、引用は左側のヘーゲルについで
の箇所からのみ行うこととする。

る自然宗教の最初の契機である¹³。贈与とエコノミーとの関係についてのデリダの主要な議論を明らかにするために、ヘーゲルについて少々述べておくことにしよう。

光は「精神の自己自身に対する単一な関係という形態である、言い換えれば無形態という形態である」とされており、「すべてを含み充たす日の出の純粋な光」である¹⁴。それはいまだ対自ではなく、それゆえに光はまき散らされ、光がそれ自身を散種する。「純粋かつ無形態であるこの光はすべてを焼き尽くす。光は、おのれ自身であるすべての焼き尽くし (*le brûle-tout*) のなかでおのれを焼き尽くし、それ自身、何も残さず、いかなる痕跡も、いかなる刻印も、いかなる移行の兆候も残さない」(G, 265/ Gen, 238)。デリダがすべての焼き尽くし¹⁵と呼ぶこの光は「戯れかつ純粋な差異」(G, 266)であり、おのれ自身を消し去る。そのため、光は(炎として)現れた瞬間から姿を消す。しかしながら、おのれ自身を供犠に捧げるという事実、おのれ自身さえ燃やし尽くすということは、おのれを守り、変形させるということである。「供犠、提供物、ないし贈り物 (*le cadeau*) は、これらのうちでおのれ自身を破壊するすべての焼き尽くしを破壊するのではない。つまり、それらはすべての焼き尽くしを対自に到達させ、それを不朽のものとするのである」(G, 268/ Gen, 240)。供犠は「すべての焼き尽くし」の「論理」に属している。それは、供犠を維持すれば供犠が失われ、これを失えば維持されるということによって、そうなのである。つまり、いずれにしろ、すべての焼き尽くしは供犠に処されねばならない。歴史や弁証法の運動が始まるのは、まさにこのようにしてである。これは純粋な贈与である。それはおのれ自身を限定し、したがってつねにすでに「交換を開示し、その遺物を鎖でつなぎ、構成し、消費と収入、借方 (*doit*)、勘定 (*doit*) [...] というふたつの帳簿について計算する」(G, 270-271/ Gen, 243)。円環は、おのれ自身を供犠に処しながら、おのれ自身を不朽のものとする運動によって、対自的な、円環を作り出す存在者となるにちがいない。「対自的な贈与 (*Don pour soi*)。

¹³ G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Gutenberg-Project-DE, 2000, VII.A.a. Das Lichtwesen [G. W. F. ヘーゲル『精神現象学』下巻、樫山欽四郎訳、平凡社、1997年、284-287頁]。

¹⁴ Loc.cit [同前、285頁]。

¹⁵ こうした表現は、光に関する節の末尾をフランス語によって真似たもののようにみえるが、そこでは供物ないしは犠牲 (*Opfer*) がホロコースト (*holocauste*) と訳出されている。「純粋な光は、おのれの単一性を分離された諸形式の無限として散種し (*wirft auseinander*)、おのれを対自存在の犠牲に [*en holocauste*] 供してしまう。そのため、個別者はその実体において存立するようになるのである」(Cited in Glas, op.cit., p. 268. 強調は引用者) [『精神現象学』下巻、287頁参照]。

贈り物 (*cadeau*) の範型とは環状のものであり、指輪、ネックレス、鎖 (*l'anneau, la bague ou le collier, la chaîne*) である」(G, 271/ Gen, 243)。これらの贈り物は、まさに約束や契約としての与える行為であり、そこには期待された返礼がある。それらの贈与は、贈与を交換に限定してしまうことを象徴している。

贈与がおのれ自身を制限する運動、つまり贈与としては消え去りながらおのれ自身を与えること、これをデリダは緊縛と呼ぶ。この概念についてはのちほどさらに注解することにして。そのまえに、我々は次のことを問うべきである。贈与がおのれ自身を無化するのなぜか、と。その答えは、贈与がそうでなければならない (*doit*) からである。贈与のままでありつづけるためには、それが贈与であることをやめねばならない。これは「贈与の宿命」である (G, 270/ Gen, 242)。「贈与はいつも「～ねばならない」を含意している」。贈与はおのれ自身に強いることで「反対贈与を、つまり負債の空間における交換を引き起こす。私が、交換なし、返礼なしの純粹贈与をあなたに与えるとしよう。しかし、私が望むと望まざるとに関わらず、贈与はおのれ自身を守り、維持する。そのときから、あなたには負うものがなければならない。贈与がおのれ自身を守るには、あなたが負うものがなければならないのである」(G, 270/ Gen, 243)¹⁶。それゆえ、少なくともふたつの負債がある。第

¹⁶ 贈与は債務／義務 (*devoir*) にだけではなく、非人称の「ねばならない」(*il faut*) にもつながっている。Cf. the law of the “il faut” in DT, 85-86/ GT, 62-63. 「与えねばならない」(one must give)、けれども同時に「贈与や気前の良さの過剰を限界づけねばならない (*il faut*)、エコノミーによって、利益性や営み、交換によってそれらを限界づけるために」。「ねばならない」の次元は贈与の行為遂行的な側面をそのたびごとに開示する。たとえば贈与についての記述が理論的だとしても、そこに純粹に事実確認的なものはない。

債務／義務 (*devoir*) に関していえば、それが贈与の要求する絶対的な義務となるまさにそのとき、贈与のアポリアに類似したアポリアを生じさせるだろう。そのうえ、義務／債務は、それが贈与と相関関係をもつように（このとき円環を導く関係を超えているのだとすれば、*correlation* という語がなおあてはまるだろう）、過剰なもの、義務を超えたものとなるだろう。不可能な贈与は、それと「相関的な」ものとして、本来の義務／債務、何らかの借用以前の債務、義務なしの義務を有している。それは本来的に他者への通路を開き、他者の形象を与えるものであり、ここでの他者は「私」があった以前に私のうちにあるものだといえる。デリダはこの義務／債務を次のように言い表している。「何も負っていない義務、それが義務であるために何も負ってはならない義務、返済する債務をもたない義務、債務なしの義務であるがゆえに義務なしの義務 [...] 義務とはこのように義務を超えたものでなければならない。それは義務なしに、規則や規範なしに行為することを要求する [...] 義務を、何も負っていない義務と呼ぶのは、より良くいえば（より悪く言えば）何も負ってはならない義務とあえて呼ぶのはいったい誰であろうか？」(Jacques Derrida, *Aporias*, trans. Thomas Dutoit, Stanford: Stanford University Press, 1993, p.16-17 [ジャック・デリダ『アポリア』、港道隆訳、人文書院、2000 年、40-41 頁])。1980 年代の終わりから、デリダはたえずこの義務のアポリアに立ち返り、それを責任や倫理、決定の問いに結びつけている。このアポリアは、我々が他者の他者性を「承

一に、それは贈与がおのれ自身に負っている負債である。そして第二に、贈与を受ける者の負債である。それこそが、贈与が贈与 - 交換になってしまうゆえである¹⁷。そのようにして、我々は円環に入り込んでしまっている。「環状の運動は一般経済（消失の、考慮に入れられ維持された計算、つまりは考慮に入れられていない、維持されていない計算）を、循環する経済へと制限する〔＝再び緊縛する〕のである」（G, 271/ Gen, 244）。

しかしながら、おのれ自身を消し去った贈与の痕跡が、限定経済の「まえに」現れることを忘れてはならない。（私が「まえに」を引用符に入れたのは、すぐさま明らかになるように、緊縛の「あとに」、消すことの「あとに」のみ時間があるからである。）「そのため贈与は、すなわち贈与を与えること、純粋な贈り物は、それが弁証法を引き起こすにもかかわらず、おのれ自身をその弁証法によって考えられるものにするのではない」（G, 271/ Gen, 243）。一般経済と限定経済との関係をデリダがどのように理解しているのかを示したところで、交換「以前の」贈与に注意を向けたいと思う。そこでは贈与のさらに別の側面を垣間見ることができる。贈与の生起とはある出来事であり、歴史がこの出来事を思考できないのは、この出来事が歴史を引き起こすからである。「ここで時間を考慮に入れるとすれば、以前に、あらゆるもの以前に（*avant toute chose*）、つまりあらゆる規定しうる存在者（*étant*）以前に、贈与という不意の出来事があり（*il y a*）、それはかつてあったし（*il y avait*）、これからもあることになるだろう（*il y aura eu*）」（G, 269/ Gen, 242）。デリダの文章のほとんどにいえることだが、上記のそれぞれの語は分析する価値が

認し、受け入れる」ことを含意しており、それは「諸々の差異や固有言語、少数派や特殊性を重んじることを命じているのである」（Jacques Derrida, *The Other Heading*, trans. Pascale-Anne Brault, Michael B. Naas, Bloomington: Indiana University Press, 1992, 76-78 [ジャック・デリダ『他の岬』、高橋哲哉・鶴飼哲訳、みすず書房、1993年、60-61頁]）。

贈与は義務／債務を引き起こす。だが、過剰な義務、義務を超えたものもまた贈与を引き起こすのである。

¹⁷ 「贈与が他者を債務のうちに置き入れ」、限定経済に入り込む瞬間から、それは「有毒なもの」となる（DT, 25/ GT, 12）。デリダは、円環を生み出し、おのれ自身に反する（気前の良さなどの代わりに計算する）この運動を記述するために、英語の *gift* とドイツ語の *Gift* (poison) という一対の語を用いる。そして、マルセル・モースがそれを主題化したように（Cf. Marcel Mauss, *The Gift*, trans. W.D. Halls, London and New York: Routledge, 2002, p.186n122 [マルセル・モース『贈与論』、森山工訳、岩波書店、2014年、387-389頁]）、デリダは贈り物を意味するこの語の両義的な語源について、すでに1972年の『散種』所収の「プラトンのパルマケイアー」のなかで言及している（“La pharmacie de Platon”, *Dissémination*, coll. « Points », 1993 (1972), p. 163n4 [ジャック・デリダ『プラトンのパルマケイアー』、『散種』所収、藤本一勇・立花史・郷原佳以訳、法政大学出版局、2013年、209頁]）。

ある。私はふたつの側面にのみ焦点を絞ろう。ひとつめは規定可能な存在者 (*étant déterminable*) という表現である。この表現は物 (*chose*) につづいている。つまり、それは「あらゆる物以前」のあとにつづく表現であり、先の表現「あらゆる物」の規定や明確化として読むことができる。そのとき、規定可能な存在者は、物 (*chose*) とは何かということを明らかにするものとして解釈されるだろう。過剰についての文章で、私は次のことを指摘しておいた。それは、限定経済という枠組みにおいて、物は、つねにすでに意味をもち、定義され、規定されたものだということである。贈与という出来事は、この規定の外部の何ものかではない。物にその意味を、価値を、同一性を与えることによって、物を規定可能な存在者へと変えるのは、まさにこの出来事である。だが、デリダは「あらゆる物以前」とも書き記しており、それゆえ彼は物そのものが贈与という出来事によって考察されるだろうことを暗に示している。のちほど私は、デリダが物に投げかけた特殊な光が、彼のモースとレヴィ＝ストロースに関する注解においていかなる役割をはたしているのかを示そうと思う。

ふたつめは、一見したところ冗長な表現にすぎないようにみえるものを軽視してはならないということである。すなわち、「ある、あった、あることになるだろう (*il y a, il y avait, il y aura eu*)」の慣用句「ある (*il y a*)」に含まれる動詞 *avoir* の異なる文法上の時制を無視してはならない。現在時制、半過去 (*imparfait*)、前未来 (*future antérieure*)¹⁸。その系列は任意のものではない。半過去とは、デリダが次のように描写する時制である。つまり、「半過去は、したがって、ある別の現在、かつての現在ではなく、現在とはまったく異なり、それゆえ本質をもたないものである」¹⁹。他方、前未来は「あらゆる終末論を排除している」。というのもそれは「無数の半過去の、つまりけっして現在であったことがないであろう不確定な過去の前未来」²⁰ だからである。デリダの著作のほとんどいたるところにみられるようなここでの前未来は、出来事の規定しえない時間である。したがって、出来事と現実的なもの、つまり現在との見かけ上の重なりあいを問題にすることは、ふたつの段階を経由する。(1) 現在とそれ自身とのつながりが明白でないかぎり、規定されな

¹⁸ 英語の時制の規則はフランス語とは異なる。ここではフランス語についてのみ話すこととする。

¹⁹ Jacques Derrida, *La Dissémination*, Paris: Seuil, coll. « Points », 1993 (1972), p. 374 [同前、495 頁]。訳出は筆者。

²⁰ *Ibid.*, p. 375 [同前、497 頁]。

いままでありつづける過去との関係。(2)この過去を離れて未来を指し示すことで、未来は二重の意味で未規定的であるだろう。贈与に関して手短に言えば、それは予測できない効果をもたらす位置づけられえない出来事だということになる。デリダは1983年の日本での贈与に関する講演後の討論で次のように述べている。「私はいつも、私の与えるものとは違ったものを与えるわけです」²¹。そのうえ、けっしてこの(いかなる)出来事を(も)確かめることはできない。我々はただ事後的にのみ、出来事を「このようにしてあったことであろう」と認識できるのである。

(このように理解された出来事が前提とするのは、我々は〈存在〉から贈与を思考しているのではないということである。なぜなら、与えることが〈存在〉を越えた過剰であり(デリダはたびたびハイデガーと存在がある = それが存在を与える [es gibt Sein] に言及している)²²、それが〈存在〉に侵入し、これを変形させるがゆえである。我々はそれとはむしろ「反対のこと」を前提とすべきだと「いえるだろう。問われているものがいまだ論理ではなく論理の起源であるときに、ここで論理を反転させることが適切であるとすれば」(G, 269/ Gen, 242)。引用したこの一文は、私にとって非常に重要なものだと思う。論理ではなく論理の起源。これは、贈与から、贈与という出来事からも論理を思考すべきであることを意味しているのではないだろうか。贈与は、出来事を伴った様々な物(les choses)を経由して、存在者(l'étant)の規定可能性を変更する。そしてこのことは、論理的な秩序を再考することを前提としているのである。ここで私はこの話には進まない。というのもデリダもまた明らかにそうすることはないからである。さりとて、語られうるあらゆるものの背後には哲学的・論理的営みの可能性があるだろう。)

贈与という出来事はその緊縛に例外なく結びつけられている。緊縛とは、贈与そのものがそこから排除されるところの秩序をもたらすもの、贈与がそれに対して過剰であるところのものである。秩序はそれが経験的秩序であれ超越論的秩序であれ、その緊縛ゆえに創り出されるだろう。こうしたことは、緊縛が存在論的なものや超越論的なものを考えられうるものにするものであることを意味しており、それゆえそれはデリダが「超越論的超・カテゴリー」と呼ぶものの地位を占めている。緊縛は「非・超越論的なもの、超越論的領野の外部、排除されたものを、構造化する地位のなかに位置づけるよう言説に強いる」(G, 272/ Gen, 244)。緊縛であるところ

²¹ ジャック・デリダ『他者の言語』、高橋允昭編訳、法政大学出版局、1989年、142頁。

²² G, 269; DT, 22, 32-37.

ろの母体は「超越論的なものの超越論的なものとしては排除されたものを構成する [...]。そのようなものが(弁証法的な)緊縛の(非-弁証法的な)法であろう」(ibid.)²³。

c) 時間の隔たり

これまで見てきた『弔鐘』における数カ所のなかでは展開されていなかったもの、それは時間の間いであった。

「贈与と単なる交換というそれとはまったく異なる操作のあいだの差異は、贈与が時間を与えるということにある」(DT, 59-60/GT 41) とデリダは述べている。この一節は、一般経済と限定経済の関係性についてすでに言及されていたこととの関連から読まれるべきだろう。贈与は時間を与える、それゆえ贈与は時間に属していない。これは、時間がある = それが時間を与える [es gibt Zeit] に対するハイデガーの読解における贈与の存在論的な次元（この語がまだ妥当であるとすれば）である。デリダはハイデガーの思考の運動を保持する（さらに、贈与とは「本来的なもの」の領域を生じさせるがために、何が贈与に本来的なものなのかをハイデガーが知ろうとすると、デリダは彼の思考の運動がいかにしてその限界に直面するのかを示そうとする。もちろん、そこには本来的なものへの希求があるが、それが贈与を思考する地平を規定しているのだと考えるべきではない²⁴。時間化は贈与と与えるという活動から生じる。このことが前提しているのは、「時間のエコノミー」からこぼれ落ちるような審級であり、時間なき時間である。それをデリダは「絶対的忘却」という言葉に割り当てている (DT, 30/ GT, 17- 18)。それは、デリダの言う自己を抹消する痕跡と同様に、そしてこれまで見てきた贈与もまたそうであるように、自らを忘却する忘却である。贈与が存在するためには、絶対的忘却がなければならない。しかし、我々は贈与があるからこそ忘却を思考することができる。

時間のエコノミーに属さない審級は、我々が直接経験できない審級である。だが、それが時間の循環運動を伴うものであるからには、ここでも我々は緊縛が働くその仕方に再び目を向けることができる。

²³ 緊縛と緊縛構造については以下も見よ。Jacques Derrida, *La vérité en peinture*, Paris: Flammarion, 1978, pp. 366, 383, 385, 388-392, 403-406 [ジャック・デリダ『絵画における真理』下巻、阿部宏慈訳、法政大学出版局、1998 年、233、258、266-273、287-293 頁] ; Jacques Derrida, *La carte postale: De Socrate à Freud et au-delà*, Paris: Flammarion, 1980, pp. 365, 370-375, 415-421, 423-432.

²⁴ ハイデガーについての言及としては、以下を見よ。DT, 32-36/ GT, 18-22.

散種を除いては、贈与を考えることはできない（この点については、後に立ち戻る）。贈与が自身とは別のものになるその度ごとに、贈与はおのれから差異化し、おのれを異なるものにする。だからこそ、私はつねに自分が与えるものとは異なるものをつねに与えるのである。差異は現在を分裂させる。それゆえ、贈与という審級は現在として、簡単に言えば、「今」として考えられるべきではなく（いかなる仕方でも、単純な「今」は存在しない）²⁵、「同時に」〔at the same time〕ないし同時性〔simultaneity〕（“*en même temps*”, DT, 51-52/ GT, 34-35）として考えられなくてはならない。この同時性は、少なくともふたつの異なる時間の「同時に」でなくてはならない。ふたつの異なる時間は、時間であるからには共存することができず、隣り合うことはできないが、それらは相互に継起しなくてはならず、一方が継起したあとに他方が生じなくてはならない。しかも、これらふたつの時間はまさに「同時に」ある。この同時性の狂気は、無条件的な贈与の「積極的条件」である。贈与に関する我々の経験は、狂気の経験なのである。

贈与は時間を与える。しかしそれは、与えられたものが「直接的かつただちに（*immédiatement et à l'instant*）」（DT, 60/ GT, 41）返送され、返還されるべきではないかぎりで、「時間を要求」しさえする。時間は過ぎ去らざるをえないのである。同時に、デリダも引用するモースが指摘したように、返送には「締切」ないし「期日」（*terme*）があるのでなければならない²⁶。〔さらに〕繰り延べ〔deferral〕や遅延〔delay〕もあるわけだが、贈与を交換から区別しているように思われるのがこの遅延である。それにもかかわらず、期日は贈与に限界を設け、贈与を交換へと関係づけもする。贈与が贈与たりえるのは、それが限界をもち、期日をもつというかぎりにおいてのみ、つまり、贈与がどこで終わるかが知られうるかぎりにおいてのみ、である。もちろん、贈与を抹消し、それを破壊し、その過剰さを運び去るのもまた同じものである。

これらふたつの「時間」、つまり一方には遅延や繰り延べとしての時間があり、他方には同時性〔simultaneity〕や時間化する差異があるわけだが、このふたつは無関係ではない。ふたつの時間のあいだには移行関係があり、それは、デリダが時間

²⁵ それは、まさしく上述した論理のためである。Jacques Derrida, « Ousia et Gramme », *Marges...*, p. 31-78 [ジャック・デリダ「ウーシアとグランメー」、『哲学の余白』上巻所収、高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、2007年、77-136頁]。とりわけ、アリストテレスと非・同時性の同時性について書かれた箇所を見よ（61-66〔同前、111-118頁〕）。

²⁶ Marcel Mauss, *op.cit.*, p. 45 [『贈与論』前掲、210頁]。そこで彼は「ある期間を置いたのちに果たすべき義務」について言及しており、デリダも『時間を与える』のなかでそれを引用している（DT, 57/ GT, 38-39）。

的差延 (*différance temporelle*) と呼んだものによって明確になる。時間的差延は、時間の外部にある何かではない。それは時間化を時間的遅延 [temporization] と繰り延べへと変える同時性である。あるいはデリダの言葉で言うなら、それは「時間化の時間的遅延への変形」(DT, 59/ GT, 40) を生じさせる。差延とは共 - 時間性 [co-temporality] であり、時間化のなかで「いかなる「同時に」をも脱臼させる期日の遅延ないし遅延する期日」(DT, 58/ GT, 39-40) を与え、それを生じさせる。差延は、差異と繰り延べの、「エコノミー的なものと非 - エコノミー的なもの」の、そして「同じものという境位」におけるエコノミー的な迂回と「留保なき消尽」の、同時的な接続なのである²⁷。時間化から時間的遅延(遅延、待機、時間をかせぐこと)への移行は、デリダがすでに 1968 年の有名なテキスト「差延」のなかで提示したように²⁸、一般経済から限定経済への移行と一致する。この接続の同時性、この「同 - [syn-]」は、自らの「端緒」の痕跡を抹消することで、自己自身の限界、緊縛、制限 [= 再緊縛] を混乱させる。贈与と差延との関係についての問いに答えて、デリダは次のように言っている。「差延は、贈与それ自体、己れの矛盾を抱え込んだ贈与それ自体なのです」²⁹。

これまで述べてきたこととの関係から、次のことが明らかになるにちがいない。すなわち、贈与とともに問題となるのは(返却や返還の)遅延ないし時間的遅延だけでなく、時間の時間化をとおして他ならぬこの遅延を可能にするものでもある、ということである。これが、デリダが「贈与のふたつの主要構造」を区別する理由である。「一方には、特定のものを与える贈与」があり、「他方には、何かを与えるわけではないが、与えられた贈り物一般の条件を与える贈与」(DT, 76/ GT, 54) がある。前者の場合、我々は贈り物、親切さの身振り、象徴、ポトラッチ、トンガ等をもつことになるだろう。後者の場合、これらの「物」が与えられ、そして、交換されるとき、贈与は時間を、そして光や生をさえ与えることになるだろう。デリダは贈与のこれらふたつの主要構造を、言語的なイディオムを追跡しながら、区別している。後者の場合で言えば、我々は「生を与える」や「時間を与える」といった表現を扱うことになるだろう。だが、これらふたつの主要構造の区別は幾分誤解を

²⁷ Jacques Derrida, « Différance », *Marges...*, op.cit., p. 20. English translation : Jacques Derrida, *Margins of Philosophy*, trans. Alan Bass, Chicago University Press, 1982, p. 19 [ジャック・デリダ「差延」、『哲学の余白』上巻、前掲、62 頁]。

²⁸ Ibid., p. 1-29 [同前、31-75 頁]。

²⁹ 『他者の言語』、114 頁。

与えがちである。これらの構造の一方はそれぞれ他方へと通じており、時間は贈与それ自身のなかに、つまり物のなかに存在している (DT, 62)。それゆえ、「期日と時間的遅延の要求は、他ならぬ物の構造であったことになる」(DT, 59/ GT, 40)。マルセル・モースの見解もそうしたものだ。デリダにとってそれは、モースの『贈与論』のなかでも「もっとも興味深い概念であり、重要な導きの糸」だった。すなわち、「贈与とお返しを経験に参与する者たち」にとって、期日までに返還することの要求、遅れてしまっはいるが必要である期日の要求は、「与えられ、交換される物それ自体のなかに (*dans la chose même*) 刻み込まれているのである」(DT, 58/ GT, 40)。「贈与それ自身は贈与と返却を要求し、そのため、「時間」や「期日」、「遅延」や時間的遅延という「隔たり」を必要とする」(DT, 58-59/ GT, 40)。『贈与論』の序文のなかでレヴィ＝ストロースは、まさに物 (*la chose*) に関するモースの見解を軽視し、縮減してしまうことになる。

d) 物

レヴィ＝ストロースの誤りは、彼が「物の論理」のかわりに「関係と交換の論理を用いた」ことにある (DT, 98-99/ GT, 74)。そうして彼は贈与を思考する困難を厄介払いするのである。彼が物の霊であるハウ [*hau*] を必要としないのもそのためである³⁰。モースによれば、「受け取られた物は非活生的ではない」³¹。これまで見てきたように、このことは時間化と時間的遅延に関するあらゆる困難、そして差延の問いへと導く。レヴィ＝ストロースが時間の問題に直面しないのは、彼が与えることを交換に、物のある関係——その法則は物の本性に関わるわけではない——内での任意の変数へと縮減してしまったからである。象徴的な思考は「直接与えられるものの総体」によって特徴づけられるが、それが明らかにするのは「もともと物に備わる相関的な性格」³²である。象徴的なものはそれが構成されたときから完全なのであり、それを逃れるものは何もない（「言語の誕生はただ一挙にしかありえなかったのである」³³）。それゆえ、「レヴィ＝ストロースは、物の問いを除去する

³⁰ Marcel Mauss, op. cit., pp. 13-15 [『贈与論』前掲、91 頁], DT, 99/ GT, 74.

³¹ Marcel Mauss, op. cit., p. 14 [同前、94 頁] .

³² Claude Lévy-Strauss, Introduction to the Work of Marcel Mauss, trans. Felicity Baker, London: Routledge & Kegan Paul, 1987, pp. 58-59 [クロード・レヴィ＝ストロース「マルセル・モース論文への序文」、M・モース『社会学と人類学』所収、有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳、弘文堂、1973 年、38 頁] .

³³ Ibid., p. 59 [同前、39 頁] .

ために交換と関係の論理を特権視してしまうことに頭を悩ませることがなかった」(DT, 100-101/ GT, 76)。だが、象徴的なものの全体性について言えば、贈与は外部を残している。「贈与は、もしそういったものがあるのだとすれば、それは全体の向こう側 (au-delà de tout) へと赴くのでなければならない。すべての前に、すべての後に (Avant tout ou après tout)」(DT, 103/ GT, 77)。これは贈与の過剰さである。レヴィ＝ストロースに関する初期のテキスト「人間科学における構造、記号、戯れ」(1966 年) のなかですでにデリダは、全体やあらゆるものの彼方へと向かうこうした運動を素描している。そして彼は、「マルセル・モース論文への序文」というテキストにおけるこの運動を代補性 [supplementarity] という概念でもって説明する。全体には欠けているものがつねに存在しており、この不足分は全体それ自身の諸契機のかなかのひとつによって補われている。補うために用いられる契機は全体の体系から外れているように見える。そしてそれは、今度は全体を越える過剰となる。代補 (この点で、代補は補完から区別される) のなかでは、不足分と過剰は対応している³⁴。『時間を与える』のなかで代補性の運動は、「贈与の交換への置き換え」(DT, 103/GT, 77) を引き起こすものとして提示されている。そして、そうすることで、この運動は贈与の特異性を不明確なものにしてしまうのである。

レヴィ＝ストロースの還元主義は、贈与を交換によって、したがってエコノミー的循環によって再規定するために、もっとも許しがたいものとなっているように思われる。彼は、「冷たいエコノミーの理性」(DT, 61/ GT, 42) に対するモースの側の抵抗をなおざりにした。レヴィ＝ストロースが『マルセル・モースの仕事への序論』で陥ったのは、まさに冷たいエコノミーの理性の罠であり、交換の論理への過剰な信頼である。モースならば、この論理にほとんど同意はしなかっただろう。モースは、「高利貸しのような代補でもって、要するに信用貸しの論理でもって、諸価値の何らかの客観的な交換」を科学的に記述したことなどなかった。なぜなら、彼が欲していたのは、「贈与の過程の根源的な特殊性を保ちつつ、それを冷たい経済の理性との関連から、つまり資本主義や重商主義との関連から追跡し、そうするこ

³⁴ Jacques Derrida, « La structure, le signe et le jeu dans le discours des sciences humaines », *L'écriture et la différence*, op.cit., pp. 423-425 [ジャック・デリダ「人間科学における構造、記号、戯れ」、『エクリチュールと差異』前掲、585-587 頁]。この初期のテキストのなかでデリダはレヴィ＝ストロースのアプローチに触れる前に、様々な仕方ではあるが、時間や歴史といった他の主題についても言及している註があることについても注記しておこう。[デリダによれば] レヴィ＝ストロースは歴史を共時的な象徴的秩序へと還元し、そうしたために、時間化や時間的遅延等々の問題をなおざりにしている。op.cit., pp. 426-427 [同前、587-588 頁]。

とで、現在の経済交換の円環を定立するものを贈与のなかで理解すること」(ibid.)だからである。したがってモースの思考は、資本主義者の近代的な視線——この視線なら、どんなところにも経済交換の要約的計画を見いだしたであろう——に反抗している。物とは、近代的な資本主義の平板化を乗り越える手助けをするものなのである。モースは「物それ自体の利益、つまり物とは別の何かからは生じることができないような利益、与えられた物の、そして贈与と呼ばれる物の利益」(DT, 62/ GT, 42)をかりうじて提示した。これが非活動的ではない物という考えである。

デリダの著作が示すように、モースのこのような取り組みにもかかわらず、彼は贈与に到達せず、交換にかかわり続けている。デリダの言葉で言えば、「マルセル・モースの『贈与論』という記念碑的著作は、贈与について語らなかつたとさえ言うことができるだろう」(DT, 39/ GT, 24)。なぜ、モースは物を思考し通さなかつたのだろうか。デリダの応答は次のとおりである。「締切とこうした遅延との間の隔たりは、モースをして、贈与と交換のあいだにあるあの矛盾——私はそれについて多くのことを主張してきた——を見逃させてしまった」(DT, 58/ GT, 39)。それゆえ、時間の隔たりは民族学者の眼から贈与の緊縛と贈与の不可能性を隠しているものである。もちろん、物がこのような仕方では生起するのは偶然によってではない。すでに述べたように、時間的な差延は時間の緊縛によって引き起こされる。そこで産出的な時間化は時間的遅延へと変わり、そうして、贈与を限定経済とその循環のなかに参入させることを可能にする。痕跡はおのれ自身を抹消した。時間化それ自身は不可避免的に贈与の喪失へと導くことになるだろう。「時間の時間化(記憶、現在、予期、つまり把持、予持、未来の切迫、脱自等々)はつねに贈与の解体プロセスを動かし始める」(DT, 27/ GT, 14)。時間的遅延に変わることで、時間化は交換の循環に至り、それと同時に贈与を交換という別の形式から区別する明白な非対称性を考慮に入れさせるだろう。それゆえ、寛容さや評価等々の「背後に」交換の循環を見いだすモースの諸々の分析は、それらが「経済の巧妙さ」(DT, 29/ GT, 16)、計算性といったものを暴露するというかぎりでは、正確かつ不可欠なものである。けれどもやはり、贈与の法、その「ねばならない」(il faut)、言い換えれば、必然的で不可能なものとしての贈与は、こうした経済とその巧妙さを構成することで、自らを経済的な事柄の外に置くのである。

とはいえ、我々は物(*la chose*)の問いを検討し続けてきたが、これまで参照してきたモースとデリダの議論に関して言えば、この問いはいっそう不明確にならざ

るをえなかった。それでは、物についてどのように考えるべきなのだろうか。

これまで物を明確化してきたが、それはその特性の一部である。まず、物は非活動的なものではない。それは時間と差延を動かし始める。それと同時に、上述したように、物は物の出来事によってすでに貫かれており、このことが物を、日常生活のなかでそのようなものとして出会われるだろうような、規定可能な存在へと変える。だが、そうであるなら、物は循環や限定経済から出発して考えられてはならないものですらある。物は自らの時間的限界を要求し、この要求なくしては物は物たりえない (DT, 59/ GT, 40)。このようにして、物は自らを、おのれ自身の輪郭を、規定しようと努めるのである。だが、これが意味しているのは、物はこうした限界の規定「以前に」存在しているということである（すでに明確にしたように、ここで「以前に」とはある時間を強調するものではなく、時間化に「先行する」ものである）。

物についてどのように考えるべきなのだろうか。

物についての問いは、『時間を与える』のなかで偶然立てられたものではない。それがモースの読解に関係しているのはもちろんだが、デリダが民族学者の文字と精神を乗り越えようとしているのは明らかである。事実、この著作の土台となった贈与についての講義 (1977-1978, DT, 9/ GT, ix) に先立つ三年間、デリダは自分の講義をまさに物への問いに捧げている³⁵。この時期に刊行されたテキストのいくつかは、物のもつ役割との関係へと注意を注いでいる。物は、ある「ねばならない」(*il faut*) を命じる法とつねに関係している。物はこの法であるが、法そのものは自らの侵犯へと導く。つまり、「物、法 [*la chose, la loi*]、そしてそれ自身の侵犯においてしか法として定置されない法」³⁶である。ここで議論されている侵犯は緊縛とい

³⁵ 「ポール・ド・マンに招聘されて、1975 年から 1978 年にかけて、私はイェールで「物」に関する講義を行った。それぞれの年で、私はふたつの平行する授業を行い、一方はハイデガーにしたがって、他方はボンジュ (1975 年)、ブランショ (1976 年)、そしてフロイト (1977 年) にしたがって、「物」を扱った」(Jacques Derrida, «Psyche. Invention de l'autre», *Psyche. Invention de l'autre*, t.I, Paris, Galilée, 1998 (1987), p. 19-20/ "Psyche: Invention of the Other", *Psyche. Inventions of the Other*, trans. Catherine Porter, Stanford : Stanford University Press, 2007, p.412 [ジャック・デリダ『プシュケー、他なるものの発明 I』藤本一勇訳、岩波書店、2014 年、16 頁])。また、Jacques Derrida, «La Chose», unpublished seminar (1975-1978), UC Irvine, Critical Theory Archive, Jacques Derrida Papers, Coll. Number MS-C001, Box 13: Folders 1-2, 11-17; Box 14: Folder: 8 も参照。

³⁶ Jacques Derrida, «Survivre» (1979), *Parages*, Paris : Galilée, 2003 (1986), p. 151 [ジャック・デリダ「生き延びる」、『境域』所収、若森栄樹訳、書肆心水、2010 年、236 頁]。訳出は筆者。

う観念と贈与の核心にある差延を一貫して仄めかしていた。それゆえ、事実、法の「ねばならない」は法の不在を、つまり「唯一可能な贈与としての法の不在 (*l'absence de loi comme le seul don possible*)」³⁷を、前提としていることになるだろう。もちろん、同時に法と法の不在としての贈与は、そのアポリア的な運動を前提している。それをデリダは「*un pas de don*」と変わった表現をしている（これは、「贈与の一步 [a step of the gift]」や「贈与ではない [not a gift]」とも訳せるし、あるいは「贈与がない [a no of the gift]」とも訳せる）³⁸。「物はある他者 (*un autre*)」を残し、その法は不可能なものを要求する」³⁹。法以前の法、贈与、物——これらすべての系列は他者へと向けられている。他者は、我々と関係をもつことなくその「ねばならない」でもって我々が負っているものであり、同の循環に還元できないものである。「まず、物とは他者であり、法を口述し、それを書き取るのはまったき他者である [...]」⁴⁰。そこで他者の力が我々に及ぶが、それは力なき力であり、というのも他者は「固有な」ものへと、他者という何らかの「固有性」へと資本化されることがないからである（そうでなければ、それは再び我々を循環へと導くだろう）。それゆえ、物は「異他的な [heteric]」（この語はデリダの言葉ではないが、他律性 [heteronomous] や異質性 = 混交性 [heterogeneous] 等々と呼ばれているものと関連をもつことから適切ではあると思われる）原理のなかで存在している。「法はよりいっそう命令的で無制限的であり、供儀に対して貪欲である。そのなかで法はまったき他なるもの（物）から生じる。まったき他なるものは何も要求せず、おのれ自身と関係をすらもたず、おのれ自身にもだれかある人にも交換されたりしない。それ——要するに、

³⁷ Jacques Derrida, « Pas » (1976), *Parages*, op.cit., p. 62 [ジャック・デリダ「パ」、前掲書所収、89頁]。

³⁸ Ibid [同前、89頁]。

³⁹ Jacques Derrida, *Signéponge/ Signsponge* (1975), bilingual edition, trans. Richard Rand, New York: Columbia University Press, 1984, p. 14/15 [ジャック・デリダ『シニエポンジュ』、梶田裕訳、法政大学出版局、2008年、19頁]。

⁴⁰ Ibid, p. 12/13 [同前、17頁]（訳文は修正した）。「物」についての講義の冒頭で、デリダはすでに物と他性の連関について切迫している。「なぜなら、物の本質的な特性はその変えることのできぬ他性 (*inalterable altérité*) だからであり、物とは還元不可能なものとしての他者、その他性が還元され、固有化され、家族化されることができぬ他者だからである」(Jacques Derrida, « La Chose », Box 13: Folder 1, “La Chose (1)”, p. 6. 引用した箇所の訳出は筆者)。

負債性と責務について、デリダは次のように言っている。「物はある事物ではない。それは事物とは異なるものであるが、それは何かあるものという形式のもとで生じる。それは、我々自身が、この物を権利あるものにし、それを正当なものとする義務 (*le devoir*) によって、あらゆる時にこの物に縛られているという点で、我々に負債を与え、責務を負わせる物である」(Jacques Derrida, « La Chose », Box 13: Folder 1, “La Chose (2)”, p. 4)。

死 (la mort en somme) ——は主体ではない (それが擬人化されたものであれ擬神化されたものであれ、また意識的なものであれ無意識的なものであれ、それは言説ではないし通常の意味での文字の形式でもない)。すべてを要求し、かつ何も (rien) 要求しないことで、物は債務者 (私の物 (ma chose) ときちんと言いたいところの者) を絶対的な他律と無限に不平等な関係のうちにおく」⁴¹。

それゆえ、物の到来ないし出現は変様されたり、それとして認められたりすることができない。なぜなら「物は起こることなく起こる」⁴² からである。このことは、デリダが出来事について語る際に用いる特殊な文法形式——前未来——を説明する。ここで問題となっているのは次のことである。すなわち、循環に参入する以前の、「存在者」(un étant) となる以前の物「それ自体」は対象ではなく、受動的でもない。それはおのれ自身の法を我々にさしだし、この法は不可能なものを要求する。したがって、物は同一性という項のなかで思考されることはありえない。なぜなら、我々は「何であるか」という問いを物との関連のうちで提起することはできないからである。同じことは贈与にもあてはまる。それは、「物の法が特異性であり、差異ですらある」⁴³ からである。物はどんなときにも我々から逃れ、それは決してここに存在したり、現前したりしない。だが、それは差異を「ここ」と現在の只中にもたらし、不可能なものに照準を当てることで、諸物を変える。贈与と同様に (物は贈与なのだから、「贈与として」と言ってもよい)、物は「交換を越えて残存し、かけがえのないものとして残存するのである」⁴⁴。

物の問いとともに、我々は贈与のもっとも重要な様相のひとつに到達する。つまり、それは贈与の「出来事性 [eventality]」である。

⁴¹ Jacques Derrida, *Signéponge/ Signsponge*, op.cit., p. 48/ 49 [『シニエボンジュ』前掲、57 頁]。

⁴² Jacques Derrida, « Survivre », op.cit., p. 181 [『生き延びる』前掲、262 頁]。

⁴³ Jacques Derrida, *Signéponge*, op.cit., p. 14/ 15 [『シニエボンジュ』前掲、19 頁]。講義では、物がいかにかして単独的なのかを示すために、デリダはついに大文字の T で Thing と呼び (フランス語では Chose) と明確に記している。それは事物から区別されるものであり、同時に、物という概念や物の物性等々とも異なるものである。「物とは単独性であり、その単独性は何ものでもない [...]。だが、物は存在する」(Jacques Derrida, « La Chose », Box 13: Folder 1, “La Chose (2)”, p. 4)。「物を物 - であることに置き換えることのできないものにする物の物 - 性は、物の単独性であり、単独性としての物である」(Jacques Derrida, « La Chose », Box 13: Folder 1, “La Chose (3)”, p. 4)。

⁴⁴ Jacques Derrida, *Signéponge*, op.cit., p. 16/ 17 [『シニエボンジュ』前掲、20 頁]。

3. 贈与と出来事

すでに何度か指摘されたように、贈与は、贈与である物 (la chose du don) は、対象ではない。さらには、その時間との関係ゆえに、またそのアボリア的構造（および緊縛構造）ゆえに、贈与はけっして現前しない（時間的な意味でも、空間的な意味でも）。端的に「贈与を贈与として、そのものとして認識することは、認識が感謝となる以前から、贈与としての贈与を無効にする。贈与の端的な同定は、贈与を破壊するようにみえる」（DT, 26/ GT, 14; 訳は変更）。この一節は本稿の初めに部分的に引用されたが、いまや私は、贈与の「そのもの」にとっての不可能性を強調するために、異なる観点からこの一節に立ち戻りたい。贈与は現象学的な「として－構造」をもっていない。なぜなら贈与は、それが「そのものとして」現れる瞬間から消失し、さらに悪いことに、破壊され無効にされるからである。

では、贈与を思考するために、どうすれば、贈与がエコノミー的円環のなかに制限〔再－緊縛〕される前に贈与を把捉し理解する（問題なのはこうした再固有化である）ことができるのだろうか？

a) 散種

デリダは、「モースは循環し、旅をし、彼が贈与という語で理解するもの、彼がギフトと呼ぶものを、異なる文化の間で同定する。そういうことができるのは翻訳のおかげであるが、そうした翻訳をいかにして正当化するのか？」と尋ね、この問いを次の問題と関係づける。「彼は、異なる諸文化に属し、異質な諸言語で表されるさまざまな種類のきわめて数多くの諸現象を、贈与という唯一の、同定可能とされるカテゴリーのもとで、「贈与」という記号のもとで取り集め、比較するのだが、そうしたことを可能にしている予期の意味論的地平とは何か？」（DT, 41/ GT, 26）その答えの一部は、モースの失敗の理由をなすものの解明とともにすでに与えられていた。すなわち、贈与が自分の作動させる厳しい緊縛を通じて円環に入るさいの、贈与の痕跡の抹消である。しかし、答えのまた別の部分が前提とするのは、我々が痕跡を考慮に入れ（「痕跡とテキストの首尾一貫した問題系を基盤としてのみ、贈与の問題系はある」DT, 130/ GT, 100）、翻訳の非正当性と、贈与と与えることを意味論的な核ないし中心 (foyer) に還元する意味論的地平の非正当性を指摘することである。「組織されたエコノミーあるいは多義性〔polysemia〕がその周りに集ま

のようなこうした意味論的中心 (*foyer*) は、実のところ欠けつつあるようにみえる」(DT, 68/ GT, 48)。贈与の狂気は「『贈与』の語ないし意味を焼き尽くし、その用語や芽とともにその灰を回帰なく散種し始める」(DT, 68/ GT, 47)。

与えること、与えるということの統一的意味の欠損を描写するために、デリダは散種という語を用いる。すべての贈与および、贈与と与えることを表わすすべての表現の結集を可能にする、そうした意味の欠損を描写するため、である。つまり散種は、「贈与の回帰なし」(DT, 69/ GT, 48) を思考することを許す可能な諸概念のうちのひとつなのである。これが意味するのは、贈与は唯一の原理をもっていないこと、「父」をもっていないことである。「散種は父へと回帰しないもの、つまり、与えているようにみえる者にはけっして回帰しないものである」⁴⁵。

b) 贈与の言語、言語の贈与

贈与の散種の抹消された痕跡を辿り直すために、デリダは4つの方向を数え上げている (DT, 71-77)。これらの方向の各々は、この散種と手を切る戦略としても見ることができるだろう。

第一に、動詞「与える」を伴った表現を用いるあの言語行為の問い。つまり、たとえば「誰かの言葉を与える」(「約束する」を意味する)、「命令を与える」(指図の意味で) など。この問いは、「能与的意識 (*conscience donatrice*)」という、より一般的な現象学的問題と結びついている。

第二に、翻訳、隠喩化などを可能にする一般的等価物の存在についての問い。こうした等価物があるとすれば、それは超越論的であり、贈与を散種から防御するだろう。

第三に、「贈与」(名詞)を用いる固有言語から、「与える」(動詞)の構文を用いる固有言語を区別する線。

最後に、すでに言及された、贈与のふたつの主要構造のあいだの差異。一方には特定のものを与えること、他方には与えることの条件を与えること、がある。

デリダは贈与と言語との独特の関係を払っている。それは「固有言語を避けること」を不可能にするようなものである。そして彼は問いを提起する、「固有言語の差異を超越する贈与の本質の概念を切り離すことは不可能ではないだろうか？」(DT, 76/ GT, 54) 贈与と与えることについて語るために我々が用いる言語は、

⁴⁵ 『他者の言語』、118 頁。

贈与の「根源的」散種、贈与の「そのもの」の本質的欠損を証言している。

贈与を認識可能にするような贈与の何らかの一般的等価物があるとする立場に対しては、与える過程のなかで与えられたものが、与える行為それ自体を変容させ、変更させるのではないかと尋ねることができる。「言い換えれば、「与える」行為の直接的「対象」は、与えることの与件は、その行為の意味を毎回根源的に変化させるのではないか？」(DT, 70/ GT, 48) この問いは疑いなく、物 (*la chose*) についての問いに連関し、物のもつ差異は与える行為の意味に活発に影響をもたらす。以下は、デリダによって示された〔与えられた物が与える (*give, donner*) 行為の意味を変化させる〕例のうち、ほんの数例である。命令する〔*give an order*〕、教える〔*give a lesson*〕、値段を言う〔*give a price*〕、印象を与える (*donner une impression*)、誰かを警察に引き渡す (*donner quelqu'un à la police*)、合図する〔*give a sign*〕、情報を知らせる〔*give information*〕。デリダのリストはこれよりはるかに長い、全ての例を列挙し、与えなくてもよい——さらには、それは可能ではない——。こうした例のいくつかは、たとえば教育する (*donner un enseignement*)、正しいと認める (*donner raison*) などのようにフランス語に特有なものであり、必ずしも他の言語に等価物をもつものではない。

それゆえ、与える物は与える行為そのものの意味を変化させる。それはまさしく、与えられたものはたんに与えられた対象ではけっしてないからである。デリダの言葉で言えば、「施し物であろうとなかろうと、与えられたものとは、その内容のこと、つまり誰かが提供する、あるいは誰かがそれについて語る、「現実の」物のことなのだろうか？それはむしろ、他者へと向かう行為、たとえばテキスト的な、あるいは詩的な行為遂行としての作品なのではないだろうか？」(DT, 79/ GT, 57) 我々は——与えられた物とともに、あるいは与えられた物なしに——与える行為そのものも与えている。そこから、贈与にとって不可避的なその行為遂行的な特性が生じる。行為遂行的な行為を与えることとしての与えることは、他者に恩恵を負っている、たとえその他者が贈与を拒否し、したがってその発話内的な力を認識せず、否定するとしても。しかし、行為遂行的なものとしての贈与は、まさに円環に入るもうひとつの手段だろう。物 (*la chose*) は行為の特徴を変化させる、だからそれは与えられる者に恩恵を負った与えられる行為なのである。

与えることは、与えられた対象とけっして単純には一致しない贈与 - 物から、その力を取り込んでいる。贈与とは、物とは、同定〔＝同一化〕されることなく恩

恵を負う他者のことである。それゆえ、自分自身を抹消した痕跡の標として、ここには「贈与の行為——アーカイヴと行為遂行的操作の両方の意味での行為〔act〕——そのものに結びついた」(DT, 63/ GT, 44) 物がある。しかし、他者は、贈与は、自分自身を抹消し、自分自身を忘却し、この与えることの「動作主」ゆえに、贈与「それ自体」ではなく、与える人物であるように見える⁴⁶。この視点から見れば、贈与の出来事はその秘密を最も完全に露わにしている。

なぜなら、贈与の出来事とは、構造を変容し、変化させるものであり、構造そのものの立場からは思考不可能にとどまるものだからである。つねに不安定な状況——出来事はその見かけ上の安定性をつくりだす——のなかで出来事の痕跡を抹消するために、その全面的無力さという絶対的秘密のなかで、出来事はつねに他者へと開き、(「自分自身を」) 他者に負っており、いかなる行為遂行的な力や他の力をも越えるのである。

Darin Tenev, “Gift and Exchange in Derrida (Derridative)”

Reprinted by permission of Darin Tenev.

訳＝横田祐美子（立命館大学博士課程）、

松田智裕（立命館大学博士課程）、亀井大輔（立命館大学准教授）

⁴⁶ Derrida, *Signéponge*, op.cit., p. 17 [『シニエボンジュ』前掲、20 頁]。